

TRANSITION TO HEALTH (007)

風邪・インフルエンザ予防 ③

～ ワクチンを打つ前に よく考えてみましょう ～

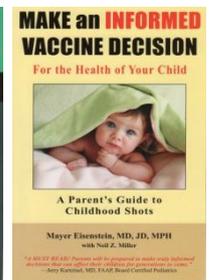
メディアが伝えないワクチン先進国アメリカのワクチン災禍

アメリカの有名ジャーナリスト Alex Jones 氏 (右写真) のラジオ番組である『Alex Jones Show』の日曜版 2009年8月25日放送分の動画が、当時、YouTube にアップロードされていた (全編 2時間)。この中で、ワクチン先進国のアメリカの現状を次のように伝えていた。アメリカの若者は今や (2009年当時)、15歳で脳卒中、25歳で心臓麻痺を起している。そして数百万人の若者がアルツハイマーやその他の若年性脳疾患になり始めている。1,000% (十でも百でもなく、千です!!) の割合で増加している若年期癌で子どもたちが死んでいる。アメリカ人の癌死亡は、1950年代は33人に1人だったが、現在 (2009年) では3人に1人に増えている。この最大の要因は、ワクチンにあるのではないかと強く疑っていた。



ワクチンを打つな!! (米国の超有名スーパードクターが警告)

このラジオ番組に、米国国家医師会認定医、米国公共予防医学会認定医、米国品質保証医療評価会認定医で、弁護士でもあるドクター Mayer Eisenstein 氏がゲスト出演し、ワクチンの危険性を訴えていた。Eisenstein 先生の専門は産婦人科学で、数多くの著作や医学映画製作でも知られ、シカゴ映画祭受賞歴 (『A documentary on home birth』) を持つ。Eisenstein 先生曰く、「我々産婦人科医グループは、この30年間に自宅出産を含め2万人以上の赤ちゃんを診てきた。予防接種率は、10～15年前の9～10%から5%に減り、現在 (2009年) では事実上0%である。自閉症、気管支喘息、糖尿病、アレルギー疾患など、子供がよく罹る慢性疾患は我々のグループでは皆無である。」「アメリカの自閉症の発生率は、27年前 (1982) の2万5千人に1人から、現在 (2009) では86人に1人 (290倍) に増加しているが、我々のグループでは自閉症児の発生は0人である。気管支喘息の発生率は0.1% (一般大衆の120分の1) である。また、アメリカ国民の75%が日光浴不足のため過度のビタミンD欠乏状態で、免疫力が下がっている。」「日焼



財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原 6 丁目 8 番 1 号

TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

http://www.kenshin-shizuoka.net

E-mail:info@kenshin-shizuoka.net

け止めクリームで皮膚がんを起こしている。紫外線で起こった皮膚がんは1例もない。」等々訴えていた。

ワクチン先進国アメリカでは、ワクチンの副反応は重大な問題であるようだが、メディアは伝えていないようだ。また、この番組の中で、アーミッシュ (The Amish) について触れており、アーミッシュには、自閉症児はいなく、癌も少なく、気管支喘息も少ないと。アーミッシュとは、ドイツ系移民の宗教団体で、移民当時の生活様式を保持し、農耕や牧畜によって自給自足生活をしており、もちろん、ワクチンは一切打っていないという。

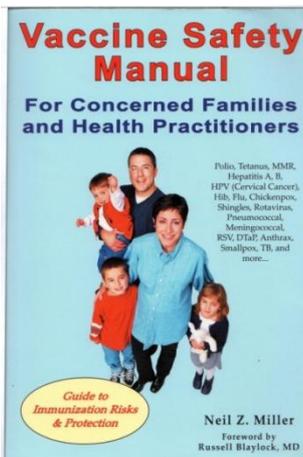
ワクチンを打つ医者が無知であることが大問題

『Alex Jones Show』の2009年9月4日放送分には、世界的に著名な脳神経外科医 Russell Blaylock 先生がゲスト出演していた。Blaylock 先生曰く「大問題なのは、一般の家庭医、内科医、小児科医がワクチンの毒性についての事実を全く知らないこと。学術論文を読まず、政府機関のパンフレットや製薬会社の添付文書に眼を通すだけ。医学部では免疫反応機構の講義はあっても、ワクチンについては全く教えていない。学術資料を読んで勉強しようとしてもしない。多くの医師は神経科学については全く無知である。脳内の免疫反応によりグリア細胞が活性化され興奮毒性が起こると話しても、多くの医者には馬の耳に念仏だ。」という。Eisenstein 先生同様、Blaylock 先生も、日光浴の大切さ、活性型ビタミンDの重要性を訴えていた。私・丸山も、新型インフルエンザがメキシコで発生した年2009年の3月までは、ワクチンに関して全く無知な医者ひとりでした。



『ワクチン・セーフティー・マニュアル』(2008)より

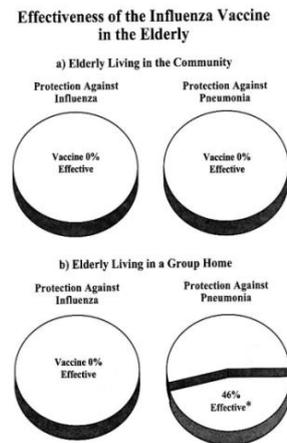
アメリカ人の医学研究ジャーナリストで自然健康擁護家の Neil Z. Miller 氏が2008年に著した『Vaccine



Safety Manual』は、過去40年間のワクチンに関する1,000件を超える研究論文をまとめたものです。この本は世界的に著名な脳神経外科医である Russell Blaylock 先生(前出)が強く推薦しているものです。この本のインフルエンザワクチンに関する部分を一部ご紹介します。

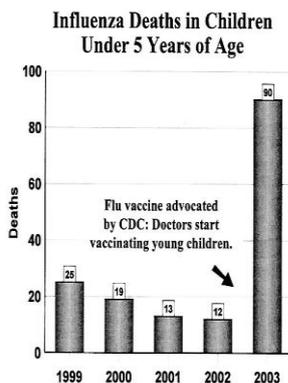
a) 健康成人では、インフルエンザ感染防止効果・・・0%、重症化(肺炎)防止効果・・・0%、つまりワクチンは、全く無効である。(右図・上)

b) 基礎疾患を有する成人では、やはりインフルエンザ感染防止効果・・・0%、重症化(肺炎)



防止効果・・・実際に流行しているウイルス株がワクチン株と完全に一致した

場合には46%有効と考えられるが、一致しない場合には0%有効、すなわち100%無効である。インフルエンザウイルスは絶えず変異しているので無効と考えた方がよいということだ。(上図・下)



In 1999, before flu vaccines were recommended and administered to small boys and girls, just 25 children in the United States under 5 years of age died from influenza. In 2000, 2001 and 2002, there were just 19, 13 and 12 influenza deaths, respectively, in this age group. However, in the latter half of 2002 the CDC began advocating that all young children receive influenza vaccines. Thus, doctors started vaccinating as many young children as possible against the flu. The following year, in 2003, influenza deaths in children under 5 years of age skyrocketed to 90 cases—a sevenfold increase over previous years. Source: CDC, National Vital Statistics Reports. Copyright © NZM

左図)は5歳未満の幼児のインフルエンザ死亡の推移です。ワクチン接種がまだ勧められていなかった時は、インフルエンザ感染による死亡は着実に減ってきていましたが(1999年25人→2002年12人に減少)、米国疾病対策予防センター(CDC)が、幼児へのワクチン接種を勧奨した途端、翌2003年には、インフルエンザ感染による死亡が90人に激増しました。要するに、5歳未満の幼児にとって、インフルエンザワクチンは無効であるばかりか、かえって危険で、インフルエンザに感染しやすく、また重症化しやすいと結論づけている。

最後に ワクチンを打つ前に、是非考えてください。(丸山正明)